

「母のものがたり②」

高名 祐美

前回、母を主人公にして、私の家族のことを書いた。今回は続いて、母の病気にまつわるはなしを書こうと思う。

＜母の最期＞

平成10年7月14日、母は私がMSWとして勤務する病院の個室で最期を迎えた。享年61歳。今の私の年齢である。もっと生きたかったと思う。母はどんな思いで旅立ったのだったのだろう。同じ年になって思いをはせる。

母の生きた61年、晩年は病との闘いだった。最後になった入院生活は6か月。母に付き添うために仕事を辞めた父は、母の病室で終日過ごした。病室は父が泊まることができる特別個室だった。その個室が母の最期の生活の場になった。1月に入院し、冬を超え、春を迎えそして夏へと季節は変わった。病室に金魚鉢を持ち込み、金魚をながめて父と過ごす。私は母の病室で昼食をとった。父の昼食は私の担当で、毎日父の分と自分の分、弁当を二つ持参して出勤した。夕方には妹が父の夕食を持参した。父は朝いったん家に帰り、妹の作った朝食をとり着替えや入浴などすませてまた病院へ。そんな毎日だった。尿閉、指の皮膚潰瘍、腹水貯留、食欲の低下、間質性肺炎と様々な症状が出現し、母は日々弱ってい

った。退院の話がでることはなかった。

1年前にも全く食事をとらなくなり、入院した。このとき入院生活は6か月に及んだ。長く入院したが、なんとか回復して退院することができた。その時の記憶があった。今回も大丈夫。母はきっと乗り越えてくれると私は信じていた。しかし、かなわなかった。

亡くなる1週間前、母の状態が急変した。朝出勤したが、病棟から「母が急変した」と連絡を受け、急きょ休みをもらってそばについた日のことだった。

母:(私服でいる私に向かって)どうしたの? 仕事は?

私:今日は夏休みをもらった。

母:お父さんは?

私:今、ここにいないよ。どこにいったんだろう? 煙草を吸いにいったのかもしれないね。

母:お父さんは、いつもいてほしいときいない……

私:そうなの? 呼んでこようか?

母:……(しばらく黙って顔がゆがむ)もうつらくて、つらくて……もうだめだわ。

死ぬのがこんなにつらいと思わなかった……

母の様子は明らかに違っていた。苦痛で顔をゆがめ、「死」という言葉を口にする。死ぬ？母が？目の前に起きている現実が受け止められなかった。慌てて父を探しに行った。

しばらくして主治医が病室に回診にきた。

Dr:三輪さん、どうですか。

母:先生。つらいです。もう頑張れません。

長いことお世話になりました。ありがとうございました。

Dr:(おだやかに)三輪さん、大丈夫ですよ。

今まで先生には弱音を吐いたことがない母だった。どんなに調子が悪くても、先生の前ではにっこりと笑い、「大丈夫です」と答えていた母だった。先生の前で初めて「もう頑張れない」と。こんなとき医師はどんな思いで言葉を返すのだろうと思った。

そのあと、父と妹と私、3人そろって医師から母の病状について説明を受けた。7年間の闘病生活の中で初めてのことであった。いつも私だけが聴いて、父と妹に伝えていた。MSWとして病気の知識がある私の説明だけで、父はそれ以上のことは望まなかった。「祐美、また頼むな。」というだけだった。

医師の説明。それは厳しい内容だった。「間質性肺炎で、肺が機能していません。血漿交換も血圧がさがるのでできなくなりました。残念ながらターミナルの状態です。もちろんできるだけ苦痛は取り除くようにしますが、厳しい状態です」と。覚悟をしたほうがよいとのことだった。父は医

師の説明に泣き崩れた。その日から1週間。つらくて長い1週間だった。平成10年7月14日、17時42分。母の呼吸が止まった。

<母の病気>

私の記憶をたどる。母は昭和53年1月、昼食準備中にけいれんを起こし救急入院した。私が高校3年生のときだった。その時の診断は「脳腫瘍疑い」。結果的には脳腫瘍の疑いははれたが、そのあと精神的におかしくなった。精神科受診をして、長く薬を続けていた。父からは「お母さんはうつ病のようなものだ」と聴いていた。その後、三叉神経痛、球後性視神経炎と続く。一時は失明。私が大学生のころである。眼科での治療を続け、ステロイドの大量投与で、細くスタイルの良かった母が別人のごとく太ったりした。

仕事は休むことが多くなり、「職場の皆さんに迷惑をかける」と、母は悩んでいた。京都の大学で学んでいた私が、就職が決まり実家に帰ってくることになった。それで母は私と入れ替わりに、仕事を辞めることを決断した。母が47歳のときだった。私が地元の公立病院にMSWとして採用されたことを母はとても喜んでくれた。「これからは祐美が病院にいるから安心ね」という母だったが、どこか寂しそうだった。仕事は続けたかったのだろう。なによりも養父母と日中を過ごすことが苦痛だったのかもしれない。

退職して専業主婦となった母。娘二人を嫁がせ、孫4人に恵まれた。そんな平穏な暮らしの中で次の病気が母の生活を脅か

していった。

平成3年4月、私が次女を1月に出産し、産休明けで職場復帰したあとのことだった。「手の関節が痛い。ときどき熱も出るし、指先が白から紫色になって冷たくてもすごく痛い」と母から相談を受けた。受診した結果は膠原病「悪性関節リウマチ」と診断された。母は54才だった。それから7年間、この病気を抱えての生活。7年間で13回の入院生活をおくった。1回入院するごとに母は確実に弱っていった。

<母の日記>

母が亡くなったあと、父が母の闘病日記をみせてくれた。母が日記を書いていることを私は知らなかった。病気のこと、父との思い出、先が見えない不安と立ち向かう母の思いがいっぱい詰まっていた。母にとっての夫という存在の大きさを改めて知った。養父母に育てられた母。父と出会い、二人の娘を授かって初めて自分と血がつながった家族に恵まれた。そして娘二人が嫁ぎ、再び養父母との生活に戻った時、やはり母が頼りにしたのは父だった。母の文章は、父への思いにあふれていた。

『思い出』

栗拾い キノコ狩り

おにぎり持っていきましたよね

「かおる ここにあるよ」

声をたよりに やっとたどりつく

栗も拾った キノコも採った

キノコの王様松茸も採った

お父さん 松茸は全然わからないね

見つけた 大きく開いた一本

そっと両手で土を掘り 採ったあとは土をかぶせる

楽しかった

山でのおにぎりおいしかった コーヒーもおいしかった

春には山菜取り

秋にはキノコ狩り

雨降りにカッパを着て魚釣り

よくいきましたよね

お父さん ありがとう

一杯思い出が詰まっています

でも これからの思い出を残すことができればね

元気になれますようにと願いつつ

<母の3つの夢>

私がよく聞いていた母の言葉がある。

「お父さんが定年退職したら、二人でいっぱい旅行に行くのよ。」

「お父さんが入院することがあったら、個室で私はずっと付き添うの。」

「お父さんには長生きしてもらおうの。」

娘たちが嫁ぐ前は、父と母が子供たちを置いて二人で外出することはほとんどなかった。旅行に行くときは、子供たちがいつも一緒だった。家族だれかの誕生日は外食をして祝った。母は家族のカタチを大切にしていたように思う。「お父さんが退職したら、旅行に行くの」。父との旅行は母の夢だった。行かせてあげたかった。しかし、実現することはなかった。

二つ目の夢は、逆のカタチで実現されていた。父が母の付き添いをした。母が父を看病して個室で付き添うことはかなわなかった。

そして三つ目。現在父は88歳。母の病気をきっかけに、妹夫婦が同居を申し出てくれた。それで父は独居とはならず、妹夫婦と生活を続けている。今年になって肺気腫がひどくなり、在宅酸素療法を受けることになったが平均寿命を超えてはいる。

<母を想う>

父は母の一周忌を前に、「妻へ」と母のことを記した。私も、記憶が薄れないうちに、母のことを書いた。自分だけではなく、母のまわりで母を思ってくれた方々にも原稿をお願いした。そして「馨 ～妻へ、母へ～」の文集を母へのプレゼントとして完成させた。毎晩、母のことを思いながら、文字を打ち続けた。

三回忌には、お墓に納骨した。私がお寺に嫁いでから、「血のつながらない人のお墓には入りたくない。お父さんと二人きりのお墓にしたい。祐美のお寺の墓地に作ってほしい。」と願っていた。父は母の願いを聞き入れ、私の嫁ぎ先であるお寺の墓地にお墓を立てた。

七回忌には、職場の医療雑誌に「母の死から学んだターミナルケア」を投稿した。昨年は23回忌の法要をつとめた。

節目には母のことを想う。思い出を文章にして残す。これが供養なのかもしれない。母のいない私の人生がどんどん長くなり、母の亡くなった年になった。私の人生が続く限り、私にできる母への供養を続けていこうと思う。そして母が大好きだった父に、私ができるだけのことをしていこうと思う。